

滋賀女短大 ○奥村 董
式安女短大 林 仁美

京都女大家政 福井 弥生

目的 適合性の優れた、履き心地の良い靴を設計することを目的に、昨年に引き続き足部計1を行ない、下腿部・足部の形態の特徴およびヒールの靴着用による下腿部・足部の変化について検討した。あわせて市場調査を行ない考察の資料とした。

方法 資料は1988・1989年に行なった女子大生139名の計測値である。計測方法は昨年度報告と同様である。市場調査は百貨店並びに靴専門店(11店)を対象とした。

結果 1) 計測値の概観では、第1指高と母指角度の変動係数が高く、個人差のある部位であるといえる。2) ローレル示数別・体重別・身長別の分類による下腿部・足部の比較では、いずれの場合にも第1指高と母指角度は、分類に左右されない固有の部位であるといえる。3) 本資料をJIS規格の表示サイズにあてはめると、足長は77%の人が22.0~23.5cmの範囲に、ウイズは85%の人がC~2Eの範囲に分布している。4) ヒールの高さによる下腿部・足部の変化では、下腿最大囲は増加、足部のボール・ウエストは減少の傾向にある。5) 足長に対する内ふまず・外ふまずの割合は、内ふまずでは約73、外ふまずは約64を示す。また、足先の形は大別して3つのパターンに分けることができる。これらは、靴先の形の設計には大切な要素といえる。6) 主成分分析の結果は、第6主成分まで抽出され、第1指高・母指角度は他項目とは独立している。